

# ふくしまイレブン



ふくしまイレブンとは、福島県の多彩な農林水産物を代表する生産量が全国上位の11品目です。毎月おいしいアスリートを紹介します。

## 友情物語

きゅうりのトマト

ふくしまイレブン

背番号2番

トマト

背番号8番

きゅうり

ハッハッ

自分が呼吸する音だけが、妙に響く。僕は、この感じがすごく好きだ。

「ほら、気をぬくんじゃないぞ。ここからペースアップ！」

はるか前方から声がする。ついには、チリリンと軽快なベルの音。楽しそうに時々こちらを見ながら、わが親友のトマト君が自転車のスピードを上げていく。

いつもランニングをするこの町道は、ここから先しばらく緩やかな傾斜が続く。ランナー泣かせと呼ばれる理由は、その距離の長さだ。気がこないうちに、体力がどんどん奪われてしまい、大体のランナーはここでぐんとタイムが落ちる。

「ほら、どうした！根性見せてみる！」

トマト君の怒号が飛ぶ。

僕がトマト君と親友になったのには、ちよつとしたきつかけがある。

僕は同じクラスになった直後、あまり話をしたことがなかった。僕が話しかけても、トマト君は「おう」とか「いや」とか、そういう返事が多くて、なんとなくそれ以上話を続けるのははばかられるのだ。どちらかといつと、僕はみんなとうまくやっていて、トマト君は「匹狼」という感じだった。

そんな中、クラス対抗のバスケット大会が行われた。みんな、トマト君のプレーを見て唖然とした。あの感動的なプレーを見たら、誰だって彼にあこがれてしまおうと思う。彼のディフェンスを越えたプレイヤーは一人もいなかった。魔法みたいにあつという間に相手のボールを奪ったかと思うと、ものすごい勢いでドリブルしながらゴール前の僕らに素早くパスを回してくる。

結局、相手チームは一点も入れることができないまま、僕の得点は三十を超えようとしていた。

しかし、突然に事件は起きた。

僕の背中に「ドン」と何かがぶつかってきたのだ。

「イッテーイッテー……」

振り返ると、相手チームの奴が床に倒れていた。

「うわ、きゅうりのとげが刺さってる！」

「ファウルだ！こいつわざとだ！」

みんなが僕の周りを取り囲んだ。相手チームが僕に対して、どうしてくれるんだ、などと詰め寄った。違う。僕がわざとぶつかつたんじゃない。奴がぶつかってきたんだ。そう僕は心の中で叫んでいた。でも、それがうまく口にできずに、その場に立ち尽くしていた。

「おい！」

振り返ると、トマト君が立っていた。トマト君の顔は、真っ赤でくしゃくしゃに濡れていた。それは汗ではなかった。

「きゅうりを……きゅうりを侮辱するなああああ！」

大きな声で叫びながら、トマト君はものすごい勢いで相手チームの奴につかみかかった。一瞬にして、バスケットコートはリングに変わった。もう、誰が味方が敵かわからなくなっても、みくちやになつた。

先生が止めたけど、誰もそんなもの気にしちやいなかった。

その日を境に、僕は親友になった。

「おい、きゅうり！その程度か？」

自転車ですいすいと前を行くトマト君の背中が見える。どうもおかしい。自転車にしたって、早すぎる。

「トマト君、まさかそれ……！」

「あつたりー！電動自転車、買ったんだぜ！」

またやられた。

「見ろよ！追い抜いてやるからな！」

僕は地面を力強く蹴り出す。

「そいつをくっつちゃ！頑張れ頑張れ！」

僕はどんどんペースを取り戻して行く。

ハッハッ

さわやかな風を起こしながら、僕は一歩一歩、トマト君に追いつくつと懸命に走っている。電動自転車に乗った僕の親友は少し前を行く。

そんな僕らを追いかけて、入道雲がゆっくりと流れていた。



トマト

昼夜の温暖差により引き出される、適度な酸味とあふれる甘みが自慢の「じゅわっ」とした福島県産トマト。情熱の地・南アメリカが原産で、「トマトが赤くなると医者が青くなる」と言われるほどビタミンやミネラルがぎっしり。がん予防にいいとされるのは、その赤さにヒミツがあるとか。



きゅうり

福島県は夏秋きゅうりの生産量が日本一。「パリパリッ！」とした食感とみずみずしい香りが特徴で、水分が豊富なため、二日酔いや手足のむくみの解消に効果的です。新鮮なほど、とげがちくちくと刺さりやすいので注意して。